

2021.3.5

生きづらさを抱える子どもの 学びとソーシャルスキル支援事業 「わくわくクラブ」



NPO法人 子どもパートナーズHUGっこ
事務局 加藤典子

1. 団体&事業のミッション・ビジョン・アクション

子どもパートナーズHUGっこ

ミッション

- 持続可能でインクルーシブな社会の醸成

ビジョン

- 一人一人の子ども達の最善の利益の保障と主体的に生きる力の育成

アクション

- 妊娠期から青年期までの子育て・子育て支援事業の展開

わくわくクラブ



ミッション

- 一人一人の子どもの育ちを保障する地域社会の醸成

ビジョン

- 生きづらさを抱える学童期の子ども・家庭への支援

アクション

- 生きづらさを抱える子どもの学習&ソーシャルスキル支援

2. 事業の背景・目標

背景＝生きづらさ

- ひとり親家庭・虐待件数の大幅増
- 発達課題を抱える児童の増加
- 児童の自己肯定感・レジリエンスの低さ(QOL尺度調査の実施結果より)
- 課題を抱える児童や家庭に不寛容な地域社会

目標＝生き生きとした子どもの姿

- 発達やコミュニケーションの課題、家庭的な課題を抱えている低学年児童とその家庭のニーズを把握し、学習支援と遊びを通したソーシャルスキルの支援を実施する
- 児童の自己肯定感を向上させ、レジリエンスを獲得することができる取組みを実施する
- 子どもの発達や家庭の課題を受け入れる地域社会の醸成

3. 事業内容 Part.1 「わくわくクラブ」 / コロナ対応策

方針 (Policy)

- ・子どもそして保護者に寄り添いその思いを共感的に受け止める→多様性の受容と尊重
- ・一人一人の環境を調整し、合理的配慮の視点をもつ → クリティカルシンキング
- ・「遊び」を通したソーシャルスキルの獲得を目指す
- ・子どもの「やりたい!」「できた!」「もっと!」を引き出す
- ・スタッフ、地域の人々も子どもとともに成長する

対象 (Target)

- ・校区在住の小学生(原則1~4年生) 11世帯13名
- ・原則的に通常学級在籍。塾、放課後等児童ディの利用は無し。
- ・学校への行き渋り、家庭の経済的困窮、発達の課題等を抱えている

内容 スタッフ

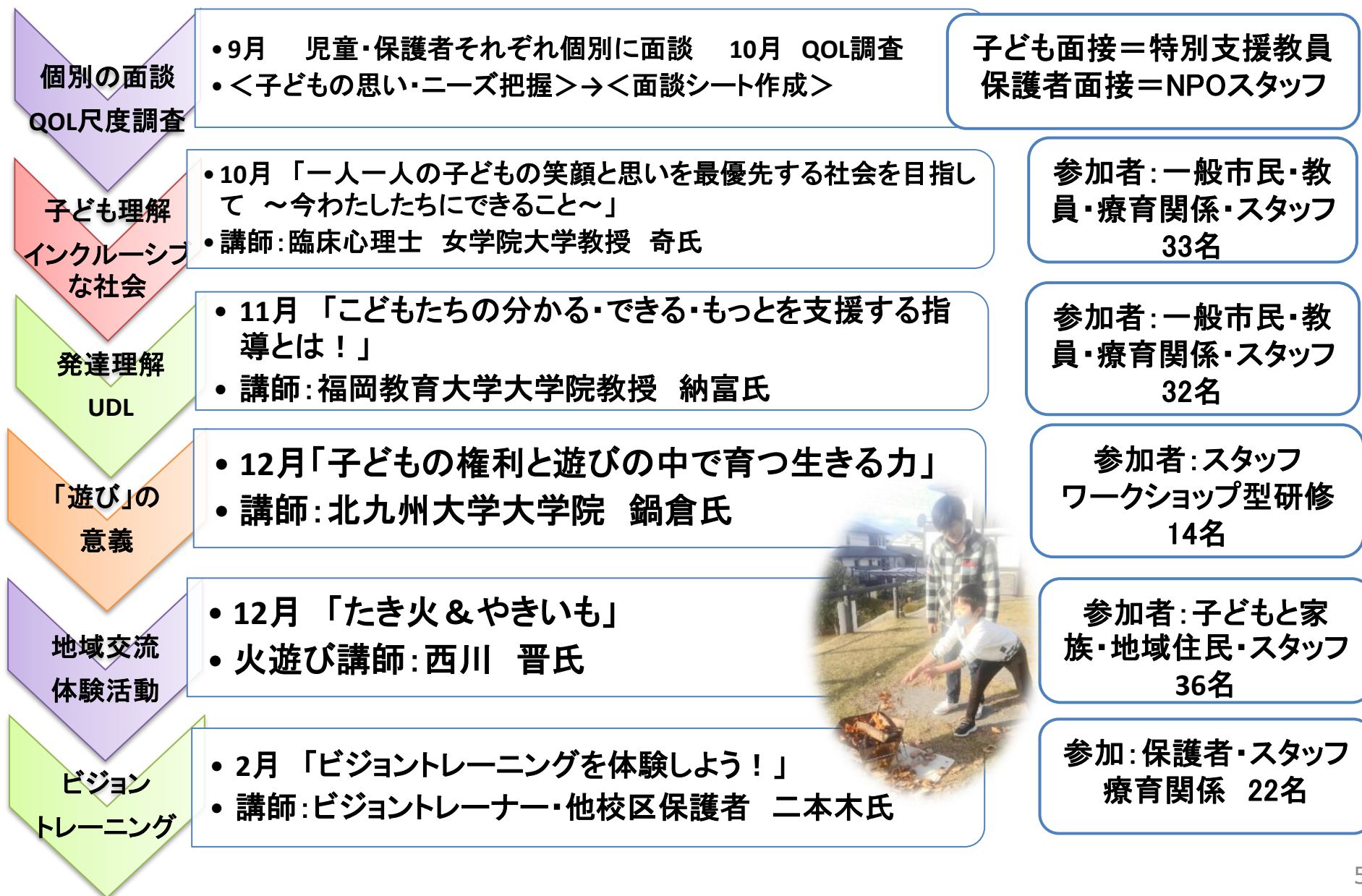
- ・毎週土曜日 9:30~11:30 全17回実施 ・地域の集会所及び公園
- ・学習支援:主に算数と国語の個別指導
- ・ソーシャルスキル支援:ボードゲーム、集団遊び、ボールゲーム
- ・希望する家庭への食品支援(フードバンク福岡、地元農家との連携)
- ・スタッフ:特別支援教員・OT・保育士・地域の学生、住民・NPOスタッフ

コロナ 対応策

- ・市教育委員会、校区小学校の対応策に準じる
- ・家庭での検温、体調チェックを保護者向けおたよりで徹底。屋外(デッキ)で受付、確認。
- ・おやつは屋外(デッキ)、公園でとる←朝食抜きの子どもがいるときは別室でパンなど。
- ・屋内マスク着用、加湿器、空気清浄器。なるべく子どもの正面ではなく横で学習支援



3. 事業内容 Part.2「アセスメント・研修会・体験活動」



4. 事業の成果 Part.1 「わくわくクラブ」

全17回 実施／のべ205名参加／参加率 92.7%

「できた!」「わかる!」
「うれしい」「楽しい」
笑顔♥



全体的な
子どもの変化

実施当初

不登校傾向
大人への暴言
投げやりな態度

支援・かかわり

暴言を否定しない
とことん相手をする
遊びを中断しない

成果

ほぼ登校
暴言がなくなる
子ども同士で集団遊び

学習の様子

何も持ってこない
「何もしたくない」
集中が続かない

達成できるプリント
100玉そろばん、おはじき
の利用
バランスクッションに座る

宿題・筆記具持参
「今日何しよっかな」
30分座って学習

遊びの様子

一人遊び
「できないからしな
い、こわい」
室内遊びが中心

まず大人と1対1外遊び
集団遊びに一緒に入る
スモールステップをほめる

同級生を誘い外遊び
上級生と鬼ごっこ
大縄跳び

自己評価

＜子ども＞毎月、自分でやりたいこと&目
標を設定→毎回できたことを記入

＜スタッフ＞毎回子どもの様子や支援の内容をス
タッフ間で共有(1時間)、対応の仕方について意
見交換。個別の支援記録作成。

アンケート結果・成果

「子ども理解 & インクルーシブ
な社会を目指して」一般向け
研修会

＜アンケートより＞「関心を持つ」「知る」「関わる」ことの大切さを学びました。「自分は自分でいいんだ！」と子どもが思えるようなかわりを心がけます。どんな子もどんなママも生きやすい社会にしていこうと思いました。

「課題を抱えた子どもの理解と
UDL(学びのユニバーサルデ
ザイン)研修会

＜アンケートより＞現代の硬直化した学校教育こそが課題と思いました。まずは子どもをしっかり観ることの重要性。失敗の価値(失敗に学ぶ)。ぜひ、第2弾を！。UDLを学びたい。従来の価値観からの脱却。批判的思考(クリティカルシンキング)の重要性。

「子どもの権利と遊びの中で
育つ生きる力」スタッフ研修会

特別支援教育教員スタッフからの要望で「遊び」の意義を問う研修とワークショップを実施。五感を使った鬼ごっこ、集団遊び、自然体験こそがソーシャルスキルやレジリエンスの獲得に有効。子ども自ら「やりたい」を言えるように。選択を子どもに委ねる。

「たき火 & やきいも」体験

スタッフからの要望で「たき火 & やきいも」体験。火を怖がる子→ひたすら木切れを拾い火にくべるようになった。初めは煤にまみれたのアルミに包まれた焼き芋に触れなかった子ども→「こんなに美味しいの初めて」

「ビジョントレーニング体験」

スタッフからの提案「眼球運動の不器用さが課題では？」他校区保護者ビジョントレーナーに講師依頼。保護者のピアサポートとなり保護者のエンパワメントにつながった。

5. 今後の課題・原因・対策



専門スタッフ (教員・OT)の不足

単に学力向上を目標にしているわけではないので、子どもの育ち、事業の趣旨に沿った価値観を共有できるスタッフが必要

高い理想と専門性をもった即戦力となりうるスタッフはすでに正規職員として働いている場合が多い

対策

市教委、福岡教育大学とも連携し人材発掘を進めると共にスタッフ研修を通し子ども理解を深めスキルアップを図る

他校区への 事業展開に 向けた準備

事業拡大・継続のための運営資金の確保の見通しが立っていない

行政も必要な事業と認識しているが予算不足を理由に却下されている

対策

今回の事業の成果を報告書としてまとめるとともに、地域コミュニティ、行政対象の報告会を実施、予算化を提案する

交流できていない 保護者との 情報共有

ひとり親家庭であったり保護者が多忙であるなど交流の機会を持ちにくい。子どもへの関心が薄い例、学校や地域に対して拒否的な事例もある

対策

迅速な対応要。
LINE@の開設、個人LINE等を通して肯定的かつ定期的に子どもの様子を伝える

通常学級に在籍しながら課題を抱えている子どもや家庭に支援が届いているか

ネグレクト、無関心傾向のある保護者へは本事業の情報が意識されていないのではないか

対策

学校、場合によっては行政福祉部局とも情報共有し、必要と考えられる家庭へは担任からも個別に勧めてもらう